

台湾風 たいわんふう

高田亜季 Aki Takada



アルファポリス文庫

風習

「結婚式と赤い爆弾」――台湾人の結婚式は、新郎新婦の懐が潤うようできている	8
「漢方の真実」――台湾人は常識として漢方の基本知識をもっている	19
「犬はアウトで蛇はイン」――台湾人は犬やとろろは食べないが、蛇なら食べる	31

人々

「ミニ版 女三代記」――台湾女性それぞれの歴史を逞しく生き抜いている	40
「言語四チャンネル」――台湾人はバイリンガル、トリリンガルも普通である	54
「二一大家族長男の嫁」――台湾人の家族親戚関係はかなり密着している	61
「お金のゆくえ」――台湾人にとって投資は国民的レクリエーションである	68
「我慢しない女たち」――台湾女性ライフスタイルにおける選択の幅が広い	81
「私のご近所物語」――台湾人は時々不躰なことも言うが親切で人情味がある	91

「台湾海峡のこちらと向こう」――台湾人は中国大陸を懐かしみ、恐れ、嫌悪し、懂れている	98
「日本人と台湾人の会話」――台湾人の日本統治時代の受け止め方は、それぞれ微妙に違う	107
「それぞれの日本人の台湾」――台湾に懂れる日本人も、やがて恋から醒める時がくる	116
「損得カンジョウ」――ぼったくりも大サービスもすべては気分次第	134

ビジネス

「働く皆さん」――台湾人サラリーマンは会社をすぐ取り替える「ヤドカリ」である	144
「リーダーの肖像」――台湾企業は規模に関係なく中小企業体質である	156
「台湾男性のシノゴノ」――台湾男性は日本人と張り合っている	163
「駐在マンVSローカルスタッフ」――台湾人を公の場で批判するのは禁じ手である	172
「タイワニーズ チョイス」――ゴージャス&お得が台湾で売れるツボである	179

生活

「カモナ マイハウス」――台湾の住宅は内装未完成のまま、スペースだけを買うものである	190
--	-----

「そこは病院」——台湾の病院は医療技術も高く、サービスも色々ある
 「タイペイライフ そろばんずく」——台湾でも都市部の物価は安くない
 「買い物道」——台湾には売る人と買う人それぞれに顔がある
 「市場でカエル」——台湾の市場は鮮度抜群、あらゆるものが毎日特価で手に入る
 「すばらしき我が家の食卓」——台湾では日本食を再現するのにもひと苦勞である
 「台湾残留日本食」——台湾には日本統治時代に伝わり、その後台湾に根付いた日本食がある
 「朝ごはんはどうする？」——台湾人のパワーの源は朝食にあり

242 234 226 220 212 205 198

トレンド

「ハハ 怒る」——台湾人の学歴偏重はヒートアップの一方である
 「憧れの？ 海外脱出」——台湾人は国籍を捨てて外国に移住することに抵抗がない
 「赤い糸はベトナムまで」——台湾人は嫁不足解消の為にベトナムへ飛ぶ
 「赤い糸で結ばれた後で」——東南アジアや大陸からお嫁に來た彼女たちの厳しい現実

272 266 257 250

あとがき

*本文中の日本円換算はすべて一元≡三・五円で計算しています。

風習

「結婚式と赤い爆弾」

台湾人の結婚式は、新郎新婦の懐が潤うようできている

最近、育児仲間の謝さんが私に向って「赤い爆弾にやられたー」と嘆いた。彼女は小学校卒業以来、全く連絡の途絶えていた同級生に「爆撃された」と憤慨するのだ。

このエピソードを言いかえるとこうなる。「彼女は小学校の同級生から結婚披露宴の招待状を受けとった」。

街中にジングルベルが流れる年の瀬、台湾はまさに結婚シーズンのピークを迎える。華人というのは、一年のうちで旧正月をもっとも大切なイベントと捉えていて、更に「めでたい新年は、お嫁さんをもらつてよりめでたく過ごすのがよし」と考えている。いきおい旧正月前に結婚式を挙げるカップルが多くなる。

私もこの時期は結婚披露宴に参加する機会が増える。もちろん披露宴に出掛ける前には、必ず招待状を受け取る。この招待状は「喜帖^{レイティエ}」と呼ばれるが、通常は封筒もカード

も「まっかつか」だ。

さて、なぜ爆弾などという物騒な言葉を使ったかという「喜帖」は本当に「赤い爆弾」という異名があり、その呼び方は一般に広く定着しているからである。由来はズバリ「喜帖」をもらったら最後、それ相応の出費を覚悟しなければならないから。

おしなべて言う台湾の結婚披露宴は、キャンドルサービスも、ドライアイスも、引き出物（お祝い返し）もないので日本より費用が掛からない。通常は大勢で賑やかに会食して、食べ終わったらすぐ解散だ。

その為、特別豪華な披露宴でもない限り新婚夫婦の黒字になる。一方「喜帖」をもらった側としては、どんなに疎遠な相手でもお祝い事なので出欠にかかわらず幾らか包まないわけにはいかない。

つまり「喜帖」はバラ撒けばバラ撒くほど新郎新婦の懐が潤うのだ。そういう訳で、もし新郎新婦が厚顔であればどんな「赤い爆弾」で知人を爆撃してお金儲けをする。披露宴に來ない人が多ければ、お祝いだけもらうので収支はより理想に近づくという算段だ。

私自身は、たかだか台湾在住八年程度なので疎遠な人から「喜帖」をもらう機会はそれほど多くはないが、それでも過去に一回だけ「赤い爆弾」に当たったことがある。

爆撃手は通称小童^{シヤウトン}といい、以前勤めていたS社の同僚だった。副総経理（重役クラス）専任運転手の彼は社内巡回お喋りが日課。よく言えば社交家、悪く言えば嗜好きの放送



恥しいポーズの結婚写真

局で、秘書として私はちよつと警戒していた。

さてその後、彼は客を迎えに行くのを忘れたり、高速道路で居眠り運転したりするミスを重ね、遂に四ヶ月分の給料を渡されて解雇されてしまった。

その彼が去ってからちようど四ヶ月が過ぎた頃、静かなS社社内はフイに小童の「赤い爆弾」によりじゅうたん爆撃された。笑顔で渡された赤い封筒を開くと、中からはドレスとタキシードで正装した二人の写真が刷り込まれた「喜帖」が。めでたい……めでたいんだけども「なぜ今さらこれを……?」。小童は同業他社の運転手にまで「赤い爆弾」を撒く徹底振りだった。

話しはそれるが、台湾人は結婚の時に遊びたらしい枚数の写真を撮る。それは、結婚式の一ヶ月前までに撮影され、出来たものは「喜帖」に刷り込み、分厚い写真集に仕立て、且つタタミ半畳ほどの巨大な額縁に加工される。写真集の表紙は重厚な木製、サイズは市販のアルバムよりさらに大きく、厚さにいたっては電話帳二冊分はある超大作だ。この写真集と巨大額縁も披露宴の当日に入り口で一般公開するのが習慣となっている。

その為に「婚纱撮影」という専門の業者があり、衣装の貸し出しからヘアメイク、撮影、写真の表装までオールインワンで面倒見てくれる。お値段は三〇〜六〇シヨットで三万〜六万元ほど。

私も恥ずかしながら結婚した時、この台湾式の「婚纱撮影」に挑戦した。もちろん衣装はウエディングドレスからチャイナドレスまで六着をとつかえひつかえで、撮影はスタジオのみならず野外ロケも敢行。通行人の好奇の視線に耐えつつあちらの公園、こちらの美術館と三ヶ所も回った。他人のベンツにもたれてはパチリ、芝生に座り二人見つめ合ってはパチリ。結局撮影は夜まで及び全行程に丸一日かかった。

その仕上がりはと言えば……、やはり三万元バックの店は衣装が安っぽいので選ぶべからず。↓即、封印。

（私が結婚したのは一九九七年のことだが、この僅かな期間に台北の「婚纱撮影」のレベルは格段にアップした。今はどの店も洗練され、グラビアのような自然で美しい仕上がりである）

話しついでに書くと、台湾人はよほどの写真好きと見え、結婚するでもないのに「婚纱撮影」店に出掛けて記念撮影する人が若い女性を中心に相当数いる。それも、ドレスを着てプロにヘアメイクしてもらい、まるでスターのようなポーズを決めてだ。画面にはシャもかかるし、修正も入るので誰でも「それなり」に仕上がるのになっている。

若い子が自分の自慢の写真を写真集にしたり額にして飾ったりするのを見ると、本当

に台湾人の欲望（スター願望）に対する素直さに感心してしまう。このように個人でお金を出して作った自分だけの写真集を「藝術照^{イッシュチヤウゾ}」という。

話しを赤い爆弾に戻そう。

小童からじゅうたん爆撃を受けた社内では早速対応策が検討された。祝儀は部署内でお金を出し合って一つにするという案も挙がったが、中には単独で包みたいという人もいて話しはなかなかまとまらなかった。ようやく出た結論は希望者だけ合同で包んで、当日出席する人にとっていってもらうというもの。私もこれに一口乗って一件落着いたが、それから二年近くの月日が流れ、この間私は小童と一度も会ったことはなかった。……それが、一日どういふつもりなのか？ 単なる社交家か、それともお祝いが欲しいのかよくわからない。

ところで結婚と言えばわたくしごとで恐縮だが、昨年我が妹（当然日本在住）が結婚した。仏教徒の家に育った妹だが、結婚式はイタリアのナントカ教会で彼と二人っきりで挙げた。なんでも、そのナントカ教会で式を挙げると、日本の戸籍に「イタリア国方式により婚姻」と記載されるのだそうだ。

最近珍しくなくなった「海外二人つきり挙式」だが、そう言えば台湾人が同様のことをした話は今まで一度も聞いたことがない。また、披露宴を一切しなかったという人にも会ったことがない。ということは、台湾人はほとんど例外なく両家をあげて披露宴をしているということになる。

では、どんなふうに行っているのだろう。

結婚式については、台湾伝統式、原住民伝統式、キリスト教式、公証結婚式などが一般的である。台湾伝統式については私も経験がないので詳しくないが、地方によってかなり習慣が違わらしい。基本的には、新郎側御一行が新婦の家に派手な高級車（レンタルのベンツ）で迎えに行つて、皆で湯圓（白玉）を食べたり、ご先祖を拝んだりするらしい。

私自身は必要があつて公証結婚をした。これは地方裁判所で簡単な式をして、そこで出される結婚証明書を受理するものだ（この証明がビザ申請時に要る）。

もしも、誰かに何の説明もなくこの結婚式の写真を見せたらどうなるだろう？ なんだか「統一教会の合同結婚式」と誤解されそうで怖い。何しろ、何組ものカップルがずらつと会場に整列して挙式しているのだ。私たちはスーツ姿で参加したが、中にはウエディングドレス&タキシードで来たカップルも数組いた。

ところで裁判所というのは元来あんまり雰囲気の良い場所ではない。廊下には「家財差し押さえ請求」やら、「離婚調停」やらの手続きに來た険しい表情の人々が溢れていたが、そんな群衆の中を正装したカップルが長いベールを引きながら縫っていくのは奇

妙な光景であった。まるで、暗黒の宇宙空間で幸せいっぱい二人だけがぼつかりと浮き上がっているように見えたことを今でも憶えている。

さて、そんなこんなで遂に披露宴だ。

今を遡ること数年、私と夫は台北での披露宴をどうするか相談していた。

夫「ホテルやレストランにするのもいいけど、辦桌が一番黒字になるよね……」

私「ええ!? 日本から両親や親戚も来るんだから、辦桌だけは勘弁して! (涙目)」

ここは泣きを入れてでも「辦桌」を阻止しなかった。

「辦桌」というのは台湾語だがつまりは「どこでも宴会」で、路肩や農家の庭先などにテントを張ってその下で宴会をするものだ。それ専門の業者もある。田舎は今でも辦桌の披露宴が多いらしいが、台北市内では最近めっきり少なくなった(それでも葬式や選挙絡みの辦桌は今だによく見かける)。

確かに、コストの点から見れば辦桌は一番安上がりだ。テーブルは折りたたみ式、椅子はプラスチック、テーブルクロスはポリエチレン(ゴミ袋と同じ)で簡便だ。最も台湾らしいスタイルと言えなくはないが、そんな事情を知らない日本の両親にイキナリ出席させたら要らぬ心配をかけることは必至である。

結局相談の末、ホテルで披露宴をすることに落ち着いた。だが、逆に招かれる客の立場であれば辦桌披露宴に出席するのも悪くない。料理の味も横浜中華街のヘタな店より

よっぽど美味しいし、なにより気軽なので、近所のおじいさんや子供も多数やつてくるのが賑やかで面白い。

「ナガシ」(日本語が台湾語化した)と呼ばれるバンドが仮設舞台で演歌を演奏したり、最後はお客とび入りカラオケ大会になったりする。南部の田舎では「ストリップショー」もあるらしいが、私はまだ見たことがないので残念だ。

ところで辦桌と言うとチープなイメージを持っていた私だが、この考えは二〇〇一年陳總統の娘さんが結婚した時に覆された。彼らは台北ではホテル披露宴をしたが、總統のふるさと台南では小学校の体育館で辦桌をした(新郎新婦の出身地が離れている場合、このように披露宴を場所を変えて二回するケースもよくある)。

これがまた、生花を使った豪華な会場セッティングで真っ白のテーブルクロスも美しく、とても立派なものだった。台南の風土を配慮して、敢えて辦桌にしたのだろう(台湾人でも田舎の人ほど、お高くとまった政治家が嫌いなのだ)。

さて、辦桌の話はここでひとまず終わりにして、結婚披露宴そのものの本質に目を移そう。

私だって日本でも何回か結婚式に出たことがある。それは仲人や上司の挨拶あり、キャンドルサービスあり、新郎新婦自らのカラオケ熱唱もありだった。まばゆいスポットライトも二人の動きを追っていた。それは、すなわち新郎新婦のハレ舞台であり、出席者

も含めて全てが二人を盛りたてるように展開する。あくまで二人が主役。一世一代の大ステージと言える。

一方、台湾の披露宴の本質は「請客^{ジシヤク}」である。「請客」とは客にご馳走し、もてなすこと。田舎の披露宴でストリップショーを見せるのもひとつの「もてなし」の形なのだ。新郎新婦がお客に求めるのは「祝儀を除いては」どんな高級な会場でも「楽しく会食してもらうこと」だけである。余興も万歳三唱も白ネクタイも一切要求しない。

反対にお客の側としても「義理」で出席することたまにはあるが、その影は非常に薄い。なぜなら台湾では「沾喜气^{ジシヤク}」といい、おめでたい雰囲気に触れると自分も運が上向いてハッピーになれると信じられており、結婚披露宴に行くのは喜ばしいことと考えているからである。そこで招待客はゼロプレッシャーの中、思い思いの服装でやって来る。

服装に関してだが、初めて台湾の結婚披露宴に出掛けた時には面食^{メンシキ}らった。その宴会はレストランで行われたが、事前に私はどんな服装で行くか大変に悩んだものだった。当時はまだ留学生の身分でありキッチンとした服も持っておらず、慌てて友人の裕福なマダムの所に行ってブランドもののスーツを借りた。バックも大家さんから借り、完璧な装いで出掛けたのだが会場に着いて呆然。

入口をうろついているトレーナーにジーンズの女性はもしや出席者？ その隣にいるジャンパー姿の男性も？

そのまさかだった。

とにかく気を取り直して会場入りしたが、中はなんとも騒然としていた。台湾の披露宴は席も別に決まっていなくて「新婦友人卓へ」と大雑把に案内されただけで、結局私はトレーナーのお嬢さんの隣に空いている席を見つけて座った。

このように、結婚披露宴も会場によってフォーマル度にバラつきがある。バントウの場合、お客の服装は普段着にツツカケもありだ。レストランでもジャンパー姿容認、一流ホテルでやつと男性招待客の九割がネクタイ着用となる。因みに先日、ハイアットホテルの披露宴でポロシャツ姿の男性を見かけた。一流ホテルの披露宴でフカヒレ食べても、服装はポロシャツ……？ だが身なりもつまるところ祝いに来たお客の自由と認識されているのか、周囲は誰も特に気にしていない様子だった。

ともかく、かように台湾の結婚披露宴はとてもフランクだ。日本人が初めて行くと拍子抜けしてしまうが、出席者としては至極気楽である。披露宴の主眼が「二人のオンステージ」というより「客へのもてなし」なので、海外で二人っきりで挙式して済ませるようなカップルがいらないのも頷ける。

また、日本の披露宴で儲かるのは結婚式場だけだが、台湾では新婚夫婦が潤うというのも大いに理にかなっているように思う。

もともと、私個人としては日本の結婚式と披露宴が好きである。自分が結婚する時はパスしたくせに出席するのが好きなのは、やはり格式ばった「非日常空間」があるからだ。

おしゃれにも気合が入るし、ひとときすまし顔でセレモニーに没頭するのはいいものだ。台湾人の場合この「非日常空間」は、紹介した絢爛豪華な結婚写真の中に実現させているようである。

披露宴に大勢の客を呼んで両家のメンツを立て、そこで出た黒字は新婚旅行や新居の準備にあて、新居の壁には「非日常空間」の写真をかけて何年でも楽しむ。まったくこの上もなく合理的だ。台湾で披露宴がこういうスタイルに定着したのもそれなりに理由があるのである。

「漢方の真実」

台湾人は常識として漢方の基本知識をもっている

ウチの長男は赤ちゃんの頃から夜ぐっすり寝ないタイプであった。毎晩なにかしら息子に起こされるので、世話する方は疲労がべったりと体に沈殿してくる。その為だと思いが、ある時口内炎が出来た。ビタミンBを飲んでも塗り薬を塗っても全く効かず三週間が過ぎ、口内炎はよくなるどころかどんどん増殖した。遂には同時に六つも出来て、水を飲むのも難儀なほどに悪化。

そんな時にたまたま駆け込んだのが「吉辰中医診所」という漢方医院である。ここの先生に粉薬を処方してもらい飲むこと三日。なんと六つもあった口内炎は跡形もなく消えてしまったのだ。

早い！ 安い！ 「吉辰」では保険が利くので、掛かった費用は全部でたったの一四〇元（約四九〇円）だった。

さてここです「中医」という言葉について説明しておく。台湾では西洋医学のことを「西医」、東洋医学あるいは漢方を「中医」と呼ぶ。そして薬もそれぞれ「西薬」と「中薬」と呼んで区別している。

またこの国では全ての国民が一律で「全民健康保険」に加入することになっているが、ほとんどの「西医」病院と一部の「中医」病院で健康保険を利用することができる。

なぜわざわざ保険について触れたかと言えば、中医の病院には保険が使える所と使えない所があるからだ。しかしこの両者とも医師は国家試験に合格し「中医師」の免許を持っている。違いは医師の方針だけである。健康保険でカバーしている「中薬」の薬材には制限がある。そこで、その枠を超えた処方をする医師は、もう始めから「ウチは保険が一切利かないから高いけど、いい薬出すよ」と標榜しているのだ。

だいぶ前のことだが私は保険の利かない所にも行ったことがある。八徳路にある「瑞宏中医診所」というところだ。行く前から既に「スゴイ」という評判を聞いていたが、本当に予約の電話がいつも話し中で掛からない。何時間も粘ってやっと通じた時は、そんなになの？　と思ったが、実際行ってみたら本当にすごかった……診立てが。

ところでひとつ、日本の皆さんにきっちり伝えたいと思っていることがある。それは、漢方薬は医師がきちんと患者の体を診察して薬を処方してこそ最高の効果があるということだ。日本では漢方薬が非常に高価で、しかも一般には医師の処方によらず「買い薬」の域を出ていない点がずっと気になっていた。それでは例えば風邪を引いた時に、薬局

で「ルル」を買って飲むのと同程度の効果しか望めないだろう。

では中医師（漢方医）の診察とはどんなものなのかと言うと、そつと患者の手首に触れて脈を診る。脈を測るのではなく、暫らく脈を診て体の状態を診断する。これを「把脈」という。「瑞宏中医診所」の陳先生は中医の奥義をまぎまぎと見せてくれた。

予約のとれた私はやつとのことで小さな医院内にこつたがえす人々を掻き分け、先生の前に座った。しかし先生は「どうしました？」と聞いてくれない。そのかわりに無言で私の手首にポンと一瞬触れただけだった。

本当に一秒も触っていなかったが、手を離れた瞬間から「鼻が悪いね。しかももう何年もだ。それに風邪も引いてるし、喉も今いがらっぽいはずだ。よく背中も凝るだろう、不眠だしそれに……」とまさに立て板に水でまくし立てた。

その通り当時私は持病のアレルギー性鼻炎が悪化して、夜もよく眠れないほどだったのだ。その上、鼻以外に気になっていた体の不調も全て言い当てられ、私はもう何も説明することがなかった。先生の診立ては一〇〇%当たっていて、占いなのかと思っただけだった。

これだけ体の不調があれば、普通「西医」だったら山のように薬を処方されてしまう。西洋医学は基本的に対処療法だからだ。しかし、東洋医学は不思議である。鼻炎も頭痛もその部位だけの問題ではなく、体全体の失調と捉える。従って薬も、体全体のバランスを改善する目的で出されるし、重病だから特に大量ということもない。

しかし、アレルギー体質を変えるのは一朝一夕には無理である。私はこの医院に二ヶ月ほど通い、毎週薬をもらって飲んだ。保険が利かないので一日分の薬代に一〇〇元かった。この薬は「これぞ漢方」と呼ぶにふさわしく、原料そのまんま。よくわからぬ薬草が色々ミックスされているものを、一包ずつ毎日鍋で煎じる。すると、強烈な漢方臭を放つ黒々とした薬が出来上がる。ゴクリと飲んでみると見かけほどは苦くないが、やはり飲みづらい。

鍋で煎じるのが面倒になって、途中で「自動煎じ器」なる、ヤカンと電熱器が合体したような器具を使ったが、薬の強烈な匂いは変わらない。台湾人は皆、昔からどこかしらでこの匂いをかいで育っているらしくあまり嫌がらないが、匂いに敏感な日本人にはけっこうキツイ。



漢方薬材

薬そのものも飲みにくいが、もっと厄介なのは「瑞宏中医診所」が患者に一律に申し渡す「注意事項」だった。それは戒律と呼んでもいいほどで、薬の効果を妨げるものを一切摂ってはいけないという。酒タバコ禁止ぐらいならまだわかるが、この戒律はとりわけ厳しかった。コーヒーもお茶もダメ、果物もりんごと葡萄以外ほとんどダメ、揚げ物もダメ、野菜もあれとこれとそれはダメ、と非常に細かい。

結局私は、症状が少し改善した所で全てが面倒になり挫折してしまった。もちろん鼻炎も完治していない。

その後、何か特に不快な症状がある時は、前出の「吉辰中医診所」のお世話になっている。保険が利く医院の方針はつまり「保険でカバー出来る薬で大丈夫。足りない時は別に保険の利かない薬を出すよ」ということだ。

しかし、保険が利く所だから効きがイマイチかと侮るなかれ。私の以前の同僚は結婚後三年間子供が出来なかったが「吉辰中医診所」で不妊の薬をもらい、二ヶ月飲んで妊娠したのだ。

私も長男出産後「うつ状態」がつかったが、この盧先生に診てもらって快癒した。この先生は「不眠」や「鬱病」「不安神経症」等精神系の病氣治療の腕もいい。薬は粉で出してくれるし、注意事項もそれほど厳しくない。

そして、中薬のいいところは医者と相談すれば西薬と併用することも出来るし、徐々に西薬の量を減らすことも可能な点だ。

ここまで読んだ読者は「いったいこの病院は何科なのか？」と思ったかもしれない。実は中医には、特に何科という区別がない（強いて言えば、捻挫などを診る「骨科」と「それ以外」に分けられるが）。

それも、つまり人の病氣を体全体の問題として見るからだ。

さて、先に中医も国家試験合格が必要と書いたが、何を隠そう台湾には本場のモグリ医者というのもある。「密医」と呼ばれるが、漫画のブラックジャックとは違って医大さえ出ていない。単に先祖代々の薬の処方を持っていて、ある特定の病気にだけ薬を出す。完全に薬事法違反の「密医」の看板は当然どこにも出ていないので、その情報は口コミだけだ。

先日近所のオジサンが「帯状性疱疹」（ヘルペス）という病気にかった。発疹がとても痛いそうである。オジサンは西医では痛み止めしかくれなかったと言って、遂にこの病氣専門の密医の門を叩いた。八〇〇元の薬を持ちかえったオジサンの病状はその後快方に向っている。自分はお世話になりたくないが、密医もそう悪いものでもないらしい。

ところでこれほど重症でなくとも、ちょっと具合が悪いことは誰にもよくあるものだ。私は毎年冬になると本当によく風邪を引く。この冬もあんまりしょっちゅう喉や頭が痛かったので、日本から買ってきた「パブロン錠剤」を一人で一瓶開けてしまったほどだ。

近所の西医にも何回か見てもらったが、薬が切れるとすぐまたふり返してしまふ。持って生まれた虚弱体質の上に、育児による睡眠不足がたたって本当にカラダはボロボロ。

お陰で私はよく人に健康食品や漢方薬を勧められる。幸いにとにかく夫はヘビースモーカーで夜も毎晩三時に寝るような不健康な生活を送っているくせに、健康食品が大好きで我が家には彼が買ってきたモノが溢れている。ちょうど風邪が抜けなくて困って

いたところなので、試しに私もウチの在庫品を飲んでみた。

まず在庫NO. 1 高麗人参エキス。……まずい！ しかし、そこをコラえて飲むこと数日。これが全く調子よくない。そこで在庫NO. 2 冬虫夏草に切り替えた。中国のオリンピック選手も飲んでいるというので、すぐく効きそう！ これは錠剤なので飲みやすかった。だが飲むこと数日、だんだん喉が腫れ、頭も痛くなって来た。

しかたがないので、今度は在庫NO. 3 刺五加にシフト。刺五加とはシベリアなどに自生する多年性灌木で、これを飲むと体内摂取酸素量が増加するという。すぎる思いで粉状のモノをぬるま湯に溶かして飲むこと数日、なんと頭痛が治るどころか肩まで痛くなってきた。

ここへ来て私も遂にギブアップ。またしても「吉辰中医診所」に駆け込んだ。仏像みたいに穏やかな顔の盧先生に、「私はこれだけのモノを試してみたのに少しも体調がよくなるらない」と訴えたところか……。

「あなたの体質は虚熱だから、調子が悪い時にこんな熱いモノを飲むとよけい酷くなる。人参や冬虫夏草や刺五加は確かに体にいいけれど、みんな熱いモノだからね」と先生は言い、反対にからだを冷やす漢方薬を処方してくれた。

これを飲むこと数日、遂に私の病魔は退散したのだった。

しかし、盧先生の解説は一般台湾人にはわかるらしいが、私にはよく理解できなかった

た。そこで、「漢方食事療法」関係の本を買い込んで読んでみた。一般に健康食品と呼ばれるものが、何故自分には合わなかったのか知れたかったからだ。

本にはまず漢方の立場から考える人体について書かれていた。人間の体は様々なバランスの上になりたっている。栄養のバランス、陰陽のバランス、各臓器とカラダ全体のバランス、摂取する五味（酸苦甘辛鹹）のバランス等たくさんある。とにかく、どれも偏ってはいけないのだ。

そして今回問題となったのは、陰陽のバランス。体の陰と陽はどちらが強すぎても弱すぎても病気になってしまう。私の場合はこの陽が強すぎて体が熱い方に傾いてしまっていたのだ。なお、この状態を表現する言葉は中国語で「虚熱」「燥熱」「陰虚」「火気大」「上火気」など沢山あるが、理解しやすいようにここでは熱い方に傾くという表現に統一しておこう。反対に陰が強すぎて体が冷たい方に傾く場合もあるし、陰陽ともに足りない人というのもある。

体が熱い方に傾くといっても、別にほてったり熱が出るとは限らない（そういう場合もあるが、私などは暑がりでもなんでもない）。しかし、口が乾く、口内炎ができる、色々考えが浮かんできよく眠れない、動悸が激しい、暑気あたりでぐったりしている等の症状が複数出ている場合はそうかもしれない。

私は、この熱い方に傾きやすい体質なのだそうだが、一般には暑い夏に人体は熱い方に傾きやすいという。

反対に体が冷たい方に傾くこともある。重症の冷え性等の場合はそうかもしれない。一般には寒い冬に人体は冷たい方に傾きやすくなる。

このバランスを手っ取り早く整えるのが、食事療法である。

全ての食べ物には「熱、温、平、涼、寒」の五種類に分けられる。その属性は、中华民族が数千年かけて人体の反応を観察し発見したものだ。いわゆる漢方薬も、すべてこの五種に分類できる。

例えばスイカ。これは「涼」に属するので、私のような人間が食べると調子がいい。夏バテでぐったりしている時は、適量食べると暑気払になるだろう。しかし、体が冷えてお腹が痛いような人は、食べると下痢をする可能性が高いので注意が必要だ。

以上の説明でわかるとおり、一般に健康によいとされる食べ物でもその人の体質、体の状態によって毒にも薬にもなるのである。結局我が家に山積みの人参エキスや、冬虫夏草は私にはあまり役に立たないどころか、体調を崩すもどだった。

これについて中医の盧先生はこんなアドバイスをしてくれた。

「熱い方に傾きやすい人が、それでも熱い食品を健康の為に摂取したい時は、体調のよい時を選んで、一日飲んで二日休むペースを繰り返すといい。それならあまり過度に熱くならないから」

さて、読者の今の体は「熱」と「冷」のどちらに傾いているだろうか？ 実際は、中医の診察を受けないとハッキリとはわからない。なにしろ風邪にも風熱型感冒（前述の

私の風邪」と風寒型感冒があり、それぞれ全く違った食事と薬が必要になるのだ。

それでも食品の属性を知っておくのは損ではないだろう。ここではより簡単に三種に分類しておく。

一 温熱食品……羊肉、犬肉、海老、酒、酢、唐辛子、ニンニク、ねぎ、生姜、ニラ、にんじん、ライチ、栗、桃等

二 平性食品……米、とうもろこし、大豆、豚肉、牛肉、たまねぎ、かぼちゃ、蓮の実、マツシユルーム、葡萄等

三 寒涼食品……蕎麦、緑豆、豆腐、豆乳、鴨肉、蟹、昆布、セロリ、ほうれん草、白菜、大根、ニガウリ、冬瓜、きゅうり、たけのこ、レンコン、なし、柿、スイカ、バナナ、サツマイモ、マンゴー等

知った上で食べてみて、調子が悪いようだったら同属性のモノも控えてみるといいだろう。なお、冷え性だが寒涼食品を食べたいという場合は、火を通して食べるとかなりその寒涼性質が緩和される。

ただし繰り返すが、人体バランスをつかさどるものは上記の陰陽バランスだけではなく、様々である。栄養その他、何につけても均等に摂取するのが肝要だ。

次に手元の本の中から、一般的な漢方の食事療法の例を挙げておこう。

便秘……水分、繊維食品を多くとること。酒、タバコ、辛いもの、濃いお茶、コーヒー、砂糖は控える。牛乳、乳製品、グアバ、肉、卵は取りすぎると便秘が酷くなる。蜂蜜は腸の動きを滑らかにするので可。

下痢……油もの、寒涼食品、冷たいもの（アイスクリームなど）、刺激物、繊維が多い食品は避ける。豆類、大豆製品、サツマイモなどお腹が張りやすいモノも不可。蜂蜜やローヤルゼリーなどは「潤腸通便作用」が強力なので厳禁。お茶はそのタンニンに止瀉作用があるので、薄く入れて飲むとよい。リンゴ、グアバ、柿も止瀉作用あり。

咳……酒、タバコ、コーヒー、甘いもの、寒涼食品、脂っこいものと海老、蟹、辛いものすべて不可。咳が激しい時は就寝前に生シヨウガの薄切りを、口の内側と歯茎の間（両サイド）に挟んで寝ると症状が緩和される。または、シヨウガを潰して赤砂糖と煮たものを毎日一回飲むのもよい。

それにしても、こう見てみると色々「うるさい」こと。でも、台湾の人は本を読まずとも上記のようなことはほとんど常識としてマスターしているらしい。特に中年以上の

人はうるさくて、よく公園で名も知らぬオバサンに「咳の出る子供に甘いもの食べさせるな」など意見される。

あつばれな漢方の「医食同源」思想は、このように台湾人の生活の中がちり根を張っている。私のような外国人はいちいち話を聞いているとうるさくてしかたがないが、それでも最近は聞く耳を持つようになった。それはすなわち、自分の体の声に耳を傾けるということだ。食べ物を食べてみて、体が何て言うかちよつと注意すると人は健康になれるらしい。

参考文献：中華食療学 張正浩主編

養生食療寶典 陽維傑医師著

「犬はアウトで蛇はイン」

台湾人は犬やとろろは食べないが、蛇なら食べる

ある水曜日のことだ。その日姑は自宅に仲間を集め、マージャンに興じていた。マージャンも佳境に入った午後一時ごろ、部屋にいるはずの飼犬「小不点」（シャオブティン）（チビの意味）がいなくなっていることに気づき大騒ぎ。その日は客の出入りが激しく、いつの間にか外へ出てしまったらしい。

家族手分けして探したがみつからず、姑は食事も喉を通らぬ意気消沈ぶり、三日目の朝、居ても立ってもいられず廟へ犬の行方を尋ねに出かけた。廟とは台湾各所にある道教と仏教が入り混じったお寺のようなもので、おみくじが無料で引けて、係の人に解説してもらえる。姑がおみくじの解釈を頼むと係の人は「この犬はもうお腹割かれて死んでるね」とすげなく言い、姑をさらに落胆させた。

この話を聞いた夫は「たった三日で、食われるなんていくらなんでも早すぎるよ」と

言った。

「食われる？」と思わず私が聞き返すと

「犬を捕まえるのを商売にしている人がいてさ、捕まえて犬肉屋に売って聞いたよ」と平然としている。

しかし私は内心どうも納得いかなかった。というのも、台湾では通常マンションの部屋の中や、店先で犬を飼っていることが多いが、あまり繋がらない。それで、街のいたるところで、飼いだぶらぶらと勝手に公園を散歩したり、路でゴロ寝をしたりするのを見かける（お陰で街は犬のウンコだらけだ）。そののんきな様子からは、捕まって犬肉屋に売られる危機感を感じられない。

私がそんなことを考えている間にも、夫は言葉を続けた。

「知らない？ 犬肉は香肉と呼ばれて、とても精がつくと言われているんだ。原住民とかが食べるらしいよ。俺は食べたことないけどね。一般に犬は1黒2黄3混色4白の順にうまいって言われているんだ」

因みに小不点はグレーで、1から4のどこにランクされるのかよくわからない。

ただ、食われないまでも小不点が帰ってくる確率はかなり低いと思った。もういなくなつた犬のことをあれこれ言うのもナンだが、小不点は私が今まで出会つた犬の中でも最も体が弱く、かつバカだった。トイレの躰もできておらず、毎日部屋の床に垂れ流し。

しかも結石持ちで、専用の缶詰を食べないと死んでしまうのだ。姑は散歩にも連れ出さなかつたので、一度外へ出たら帰り方もわかるまい。

そんな犬の肉を食べても美味いはずなからうと私は思ったが、姑は「あんなに丸々太つていたし、あそこの葬儀屋の人が犬を食べるって噂だ」と言い、たずね犬のピラを貼り歩く日々を送っていた。

それで結末は……？ 姑の祈りも虚しく小不点の消息はようとして知れず、そのまま帰らぬ犬となつた。

確かに古来中国では犬肉食の習慣があつた。だがそれにしてもどうも夫の言うことに信憑性を感じられなかつた私は、数人の台湾人に犬肉食のことを聞いてみた。すると案の定、皆が皆首を横に振って「とんでもない」と言うではないか。「私は犬を食べた」という台湾人にも今まで会つたことがない。従つて私は、現代の一般台湾人はやはり犬肉食は「アウト！ 気持ち悪い！」と思つてしていると判定する。

だがその反対に「イン！ 食べても平気」の部類に入るのが蛇である。それを私が知つたのは割に最近のことだ。

台湾は高温多湿で、肌の悩みを抱えている人が多い。病院に行けば薬はくれるだろうが、結局は症状を抑えるだけで塗るのをやめればまた元に戻ってしまうことも多い。

ウチの息子も軽いアトピーである。そんな話を育児仲間の楊さんにしたら、ずばり「蛇が効く!」と言うではないか。

蛇? 蛇の何が効く? 蛇の毒でも塗る? 正解は「蛇スープを飲む」だ。

以前彼女の三歳の娘が、掌を痒がってしかたがなかったことがあった。口コミで評判の皮膚科にも診てもらったがよくなかったという。そこで「蛇」だ。

「蛇スープ」……この私も何回か台湾人にご馳走になったことがある。随分熱心に勧められた記憶があるが、なるほどあれは蛇スープ↓体にいい↓おもてなしによし、という真心を表現したものであったのか。

さてその求め方だが、まずは店先にズラッと並べられた籠に入っている活き蛇と目を合わせないように入店。料理が出てくるのを待つ間も視線は泳がせずに固定。うっかりしていると店内で主人が蛇をウナギみたいにシャーッとさばいているのが目に入ってしまう。蛇の身は大きめのドジョウを開いてブツ切りにしたような感じでスープに入っている。薬味にしようが少々。味は淡泊で魚の澄まし汁に似ている。

それで、その三歳の娘だが、この蛇スープだけ(蛇肉なし)を二回ほど飲んだらすぐに痒みが止まり、以後再発もしていないという。これは、蛇肉に肝臓の解毒機能を高める成分が含まれており、それが皮膚に影響するからだそう。

なお、台湾でも蛇料理は日本のすっぽん料理ぐらいレアなものだが、台北だと華西街や通化街などの夜市に専門店がある。

従ってすべての台湾人が蛇食を好むとは限らないが、ともかく蔑視する風潮はこの国には全くない。

大はアウトで蛇はイン。トンソクは完全にインだが、では豚の脳はどうだろう? その答えは市場が教えてくれる。



市場の豚の脳は血もしたたる新鮮さ

つまり市場で売っていれば、その食物はインである。さあ、市場の豚肉屋へ……この軒先におら下がっているものこそ豚の脳。うねうねと皺が寄った形を崩さぬようにそつとビニールに入れてもらって帰ろう。

なにしろ非常に柔らかいので食べる時は、スープの具にするのがポピュラーだ。煮すぎないのがコツ……らしい。実はウチの夫の好物でもあるが、さすがに私も自分で料理したこと

がない。

しかし食べたことはある。味はこれまた淡泊で、口当たり柔らかく魚の白子と大差ない。但し、食べるのは豚の脳であって、猿の脳などはどこにも売っていないのでそのところを誤解しないで欲しい。

それで問題の効能だが、彼らは「吃脳補腦^{チキナウボノウ}」と言っている。脳を食べれば、自分の脳もパワーアップするという意味。この考え方は広く適用されていて、肝臓が悪ければレバーを食べ、腎臓が悪ければ腎臓を、とバリエーション豊富だ。現代ではあまり科学的根拠はないとされているがそれでも年配の人はかなり信じて実行している。

このように同じアジア人であっても、台湾人と日本人では食物に対する受容の基準がだいぶ違う。これをもう少しまとめてみよう。

台湾人がイン（食べても平気）と思う食物

「カエル、蛇、豚の脳と耳と腸と……ほとんど全身、鶏の睾丸とお尻、ガチョウ、すっぱん、鴨の舌と首と脳など」

台湾人がアウト（気持ち悪い）と思う食物

「犬、馬刺し、イカの塩辛、ところろ、△活け魚造り、△白子、△生卵、△納豆など」
（△は一部の人は食べられる物）

台湾は過去に日本統治を経験しているので、刺身を食べられる人も多い。但し、活け魚造りで魚が口をパクパクさせているのには嫌悪感を持つ人が大多数だ。白子にいたっては、食べる習慣が全くない。

基本的に中国の伝統的観念では「生食は非文明的」とされているので、馬肉や山芋をナマで食べるのには相当抵抗があるようだ（通常山芋はスーブの具にする）。また台湾人も豆腐乳など発酵食もよく食べるが、塩辛のようにナマのまま発酵させているものにはお手上げ状態。

よく日本で売られているガイドブックには、「台湾の食」を面白おかしく揶揄気味に書いているものがあるが、「奇異」と思うのはあくまでワンサイドの見方。反対側からは台湾人も日本食を「奇異」に思っているのである。

人々

「ミニ版 女三代記」

台湾女性はそれぞれの歴史を逞しく生き抜いている

ある日の昼下がり電話が鳴った。それは近所に住む姑からのものだったが、用件はこうだ。

「私の甥が日本留学の時に知り合った日本人と婚約した。今その彼女がウチに来ている。あなたとは同じ日本人なので、話しも合うだろう。後でそちらへ連れて行っていいか？」

姑のイキナリ訪問に慣れ切っている私は、即承諾した。今日は電話をくれるだけいい方である。いつもだったら何の予告もなしに呼び鈴も押さず、合鍵でガチャッとドアを開けて入ってくるのだ（姑にとっては息子の家＝自分の家。台湾人の心の垣根が如何に低いかおわかりいただけるだろうか？）。

さて、ほどなくして御一行が到着した。姑と、姑の兄の奥さん（夫からすると伯母）、

そしてくだんの日本から来た女性。急な来訪でロクなもてなしも出来なかったが、それでも和やかに彼女と歓談した。しかし、話題が家族親戚関係に移ると微妙に話しが噛み合わない。姑の実家の姓を「簡」というが、どうやら彼女は簡家の事情をよく理解していないようだった。そこで、私も未来の親戚として簡家の基本データを彼女に提供することにした。

私「あのー、つまり私の夫とそちらのフィアンセとはイトコ同士の間柄になるわけですが、実は私たちは全く面識がないんですよ。それどころか今日いらした伯母様や簡の伯父様にも会ったことないんです」

彼女「ええ？ でもそちらのお姑さんとウチのフィアンセの父親は兄妹だって聞いているんですけど？」

私「ええ、それはそうなんです、姑も二人キョウダイなので全部の人と頻繁に行き来しているわけじゃないようなので……」

彼女「二人？ そんなに……」

彼女の思考は混乱の極みに達したらしい。それも無理からぬことなのでここから先はゆっくりと説明を進めた。

姑のキョウダイは全部で十六男六女だ。すべて血は繋がっているが、なにも一人の母親が産んだのではない。私の夫からすると祖父にあたる人は、計六人の奥さんがいたのだ。姑の母親は第五夫人で、彼女のフィアンセの父親は姑とは腹違いの兄ということに

なる。

説明を聞いた彼女はやや納得したようだったが、それでもそういう特殊な家庭事情を急には消化できない様子で帰っていった。

奥さんを六人持つというのは、日本人からすると想像しがたい世界である。昔の台湾でも相当に稀なケースで、台湾一般市民の生活事情を代表するものではない。それでもこの五〇数年来、祖母、姑、ついで夫の妹の辿った道のりは、現代に至る中国、台湾の歴史の一面を映す鏡として非常に興味深いので、もう少し詳しく書いてみたい。

姑の母、つまり夫の祖母は中国広東省生まれである。八〇歳近くであっても、日常生活は何でも自分でこなす。祖母は簡家の第五夫人になった。聞く所によると本人は興入れの日まで正妻に迎えられると信じていたそうだが、実際の戸籍上は妻ではなく、妾である。祖父はかつて広東で大きな船会社を所有するばかりか、他に薬局や質屋など手広く商売をしていた大金持ち。

当時中国では金持ちが何人も妾を持つのは当たり前だったが、イスラム諸国のように合法的に複数の妻を持つことはできなかった。結局言葉では第五夫人（五太太）と呼ばれるが、祖母は法律的に正妻の権利を持たない。ただ、妾が産んだ子供も全て簡家の子として認知はされた。

広東で長女（姑）を産み、毎日優雅にマージャンに興じていた祖母の生活もやがて戦



若かりし頃の祖母（左）

乱に呑み込まれる。簡家は蒋介石とも親交があったらしいが、遂に戦火に追われ台湾に逃れることになった。祖父は全財産を売り払い六人の夫人とその子供を連れて台湾行きの船に乗った。祖母は自分の実姉も一緒に連れてゆかずだったが、この時港の混乱の中で生き別れたという。

実姉は無事台湾に辿り着けただろうか？ おそらくダメだったのだろう。なぜなら、台湾に渡った簡家は暫らく富豪としての名声を保っていたので、もし実姉が台湾に来られたなら祖母を探し出すことは難しくなかったはずだから。

祖母は台湾に渡った後、更に四児を産んだ。祖母の次女（夫からすると叔母）は祖母についてこう語

る。

「ウチの母は読み書きも出来るし、二二歳で台湾に来た時は北京語も台湾語もまったく出来なかったのに今はペラペラですごい（今の七〇歳以上の中国および台湾人には文盲がかなりいる）。それに音楽や演劇が好きで、昔は赤ちゃんを負ぶった上に両手で子どもの手を引いて、よく歌仔戲を見にいったものよ」

（歌仔戲とは台湾伝統芸能のチャイニーズオペラ。よく街頭で演じられる）

さて、台北に落ちのびた簡一族だが、最初は有り余る財力にものを言わせて西門町（新宿並の繁華街）にある通り一本の土地をまるまる買占め、居を構えていた。夫人一人につき家一軒を与え、二三人の子供それぞれに一人ずつ乳母がついていたという。

しかし、往時それほど栄華を極めた簡家もその後は没落の一途であった。財運はすべて広東で使い果たしたのか、祖父は台湾ではやることなすこと全てに失敗し、人に騙され家運は一気に傾いた。その後西門町の土地はすべて手離して別の所に移ったが、こうなると妾の立場は悲しい。最後祖父は妾一人に一軒ずつ家を譲渡しただけで、その子供ともども扶養の一切を放棄した。

五人の子供と一緒に放り出された祖母は自宅を売却し、食堂の下働きなどしながら子育てをしたという。

私から見た祖母は「ちよつと心配性な控えめな人」である。妾という華やかなイメージからは程遠い。

「ご飯だよ」と食卓を整えてくれても、いつも皆が食べている時は絶対に箸をつけない。「おかずが足りるか心配」だそうで、必ず自分は最後に食べる。昔は正妻や他の妾との関係に神経をすり減らし、老いては子に養ってもらうことに気がねをしながら生きてきた人らしいと思う。しかしながら、今でもよく楽しむマージャンの腕はすごいそう



祖母（左から二人目） 姑（右から二人目）

だ。祖母の記憶力は姑よりいいくらいで、マージャンボケ防止説には大変な説得力を感じる。

それはさておき、三歳で台湾に渡った姑はそんな特異な環境で子供時代を過ごした。裕福だった当時は乳母を連れて文房具を買いに行っても、「簡家のお嬢様」としてツケでなんでも好きなだけ買っていた。そのせだろうか、姑は今でも面白い物が好きである。高価なものは熟慮するが、今は孫の為に市場で安物をあれこれ買ってくるのが楽しいらしい。

結果ニセモノのキティちゃんやピカチュウの粗悪な服が我が家のタンスから溢れ出し、私は毎日渾身の力を込めてそれを開閉している。

その姑だが、高校を出た後、当時台北では珍しかった洋食レストランの会計をしていたという。若い時はきれいで評判だったらしい。色々モテたそうだが結局は祖母の勧めでマカオ出身の男性と結婚して一男一女をもうけた。しかし、子供が小学生の時離婚して現在に至っている。姑の性格は大変に明るく社交的、というか姑ほど大らかな人には

今まで会ったことがない。

姑のライフスタイルは台湾一般の中高年とはかなり違っている。私は長男出産前後の一年間だけ姑（さらに祖母）と同居していたが、その生活振りには度肝を抜かれた。

当時私はまだ会社勤めをしていたが、同じ屋根の下に暮らしていても、一週間ぐらい顔を合わせないこともあった。姑の起床時間は朝の一時、午後から深夜まで社交ダンスサークルに出たり、マージャンに行ったりと毎日忙しい。いったん出掛けたら私の就寝時間前にはまず帰ってこない。年齢は六〇近いのに元気な夜行性人間だ。

長男を出産した後もしばらく働いていた私は日中赤ん坊を姑に預けていたのだが、ある日こんなことがあった。その時分は本来夜行性の姑に頑張って毎朝起きてもらっていたのだが、ある日の朝七時五〇分、赤ん坊を渡そうと姑の部屋をノックしたが返事がない。痺れをきらしてそーっと部屋を覗くとモヌケの殻。ドアの前で目の前真っ白になっているところに、「ガッちゃん」と玄関ドアが開く音が響いた。

「間に合ったねー」という姑の元氣そうなこと。とても、マージャンで朝帰りとは思えない……。

とにかく、どこまでも大らかで親切な姑で、孫の面倒も喜んで見てくれる。特に同居中は色々よくしてもらった。

美味しいスイカがあるからと、切ってわざわざ寝室まで持ってきたくれたこともある（但し、夜の二〇時半にドアノックもせず！）。

また赤ちゃんが泣き止まない時は、これまたノックなしでバーンと部屋に入ってきて「私が見ているから、あなたは自分の用事を済ませてきなさい」と子供を抱き取ってくれた（姑が赤ちゃんを抱いたまま我ら夫婦のベッドに這い上がり、私の枕を背もたれにしてテレビを見始めたことに絶句してしまったのは、ひとえに私の料簡の狭さゆえだろう……）。

けれど、姑にまつわるこんなエピソードははつきり言ってまだ序の口。そんなことより週二回ほど姑のところに「帰ってくる」オジサンの方がインパクトはずっと強烈だ。このオジサンは、我が家の親戚でもなければ、姑の別れた旦那（私からすると舅）でもなんでもない。しかし、家族揃って食卓を囲む時は自分の定位置に座り、料理に真っ先に箸をつける。この頭の禿げ上がった、声の大きいオジサンはいったい誰なのか？！

……ある日こんなことがあった。朝洗面所に入ると、そこへ何の前触れもなくオジサンがやってきて「My daughter is a lawyer. Lawyer! Do you know?」（なんで自慢話は英語？）と得意気にそのライセンスを見せるではないか。オジサンの娘がアメリカで弁護士とはけっこうなことだが、いったいそれがハミガキ中である「愛人の息子の嫁＝私」と何の関係があるというのか？！

つまりこの人は一〇年越しの姑の彼である。しかもこのオジサン、六八歳の歯科医でアメリカと台湾の二重国籍（血筋は中国人）、「本妻」はアメリカに住んでいるのだ。

いったいどういう因縁だろうか、祖母と姑は母娘二代にわたる「お妾さん」の星のもとに生まれてしまったらしい。しかし、姑に日陰者風の暗さは見られない。当時同居していた私に向って明るく「本妻からオジサンに電話が掛かってきても、そんな人は知らぬ存ぜぬで通してね」と言っていた。

オジサンは堂々と、しかも呼び鈴も押さずに合鍵で家に入ってくる。リビングでパジャマのままくつろいでいる私は、フイなオジサンの来訪（帰宅？）にびっくり仰天だ。

しかし奇妙なことに、この異常事態に驚愕しているのは家族のうちで私一人だけだった。夫は「もう慣れた」と言って、オジサンとごく自然に世間話などしているし、祖母も平然とオジサンに食事を出す。姑にいたっては、私がオジサンの存在に違和感を持っていることすら気づいていないようだった。いやはや、皆さん「オープンマインド」なこと……。

結局ひとり意固地な私は、このプライバシーの一切ない四世代同居に順応できず一年で独立別居してしまった。

しかしこのオジサン、一家にとっては有り難い存在なのである。姑の生活費を毎月出してくれるのだ。ここは年金制度が確立していない台湾。我が家には姑の他に祖母もいるし、無職の舅も貯金が限りなくゼロに近く（株などに投資して貯蓄のほとんどをスツた）、オジサンの「お手当て」がなければ、一家の経済は立ち行かなくなる。

ところで、ここで時計の針を少し戻そう。姑が結婚したのは一九六六年のことだ。舅はマカオ出身の広東人で六歳の時、台湾に渡ったという。結婚当時舅は、台北に駐留していたアメリカ軍キャンプの売店で働いていた。

その時の一家の生活は裕福な方だったようで、一九七〇年にテレビを買ったのは近所では一番早かったそうだ。

一時はそんな平穏な日々もあったが、口うるさくてよくキレる舅と社交的な姑のソリは合わなかった。先に書いたとおり二人は子供が小学生の時に離婚。

こうで遂に三人目のヒロイン Shally（夫の妹の英語名）登場である。Shally は、両親の離婚後いつときだけ、兄と共に姑に引き取られていた。しかしその時のことについて

は、あまりいい話を聞かない。

ストレスからか姑は勤めが終わると連日マージャンに明け暮れ、夜の一時まで子供にご飯を食べさせないこともあったという。またこの時期、姑は当時再婚を考えていた恋人と自分の子供ともども同棲していたというから、その行動は常人の理解を超えている（その後相手が不慮の事故で



高学歴キャリアウーマンの Shally

亡くなり再婚ならず)。

さて夫もShallyも小学校時代は学級委員をするほど成績がよかったが、このあたりから異変が起こる。兄妹二人とも一〇代の頃に無責任な親に反発を感じたことを認めているが、結果的にはそれぞれ随分と違う歩みを辿った。

父親不在、母親も子供に関心を向けられない家庭環境で、夫はすっかり学業を放棄し遊びモードにスイッチ、職業高校を出た後は進学しなかった。一方、そんな兄(≡夫)とは対照的に、Shallyは自発的に親元を離れ私立中学に進学、以後大学まで寮生活を送る。

もともと勉強好きのShallyは大学を卒業して暫く会社勤めをした後、オーストラリアに留学しMBAをとって帰国した。面白いのはこの時の学費を舅、姑、ウチの夫の三人が援助したことである。この一家は一見崩壊しているようだが意外にも絆はそれなりに保たれていたらしく、このあたり台湾人家族の繋がりは不思議である。

実は本章を書くにあたり、私はShallyに簡単なインタビューを試みた。当初は「家庭不和や奔放な母親に何かしらのワダカマリを感じているだろう」と思っていたのだが、いくら話をしてもそういった怨恨は感じられない。これは夫についても言えることで、この兄妹は性格的にヒネたところが少しもなく、むしろ親を大事にしている。私には初め不可解だった。

Shally曰く「自分と母は、普段頻繁に連絡をとっているわけではないが仲はいいと思う。確かに母は個人主義で、自分の望む通りに生きるタイプだけど、今となると、子供

の世話にならなくても自分で楽しく生活できる人なのでかえってこちらも楽」。

そう、キーワードは「個人主義」。姑のみならず夫もShallyも皆この台湾式個人主義で生きているのだ。これは、冷たい利己主義とは全く違う。自他ともにその自由を尊重し、お互いに干渉しない。自分は自分の責任で生きる。言いかえれば、他人や環境からも極端に影響されることがないのだ。

これに対し例えば日本は全体主義或いは集団主義と言えるだろう。昨今日本で援助交際、不登校、いじめ、学級崩壊などが取り沙汰される時は、必ずと言ってよいほど家庭環境や教育体制の問題などが指摘される。そしてなんとなく「社会が悪い」という結論でまとめられる。それは確かに一面の事実だが、それら環境に大きく影響を受けた個人に非があるかどうかはあまり問題にされない(小学生以下に自己責任を問うのは無理とは思うが)。

Shallyも過度に環境に左右されることのない、しっかりした現代女性だ。留学を終え、暫らくすると今度はキャリアを積む為にシンガポールに単身渡って就職した。そしてかの地で永住権を取得した後は、「二人暮らしの父親」を気使って帰国し同居している。

何を隠そう舅は口うるささでは右に出る者なく、友人どころか親戚付き合いも断られるほど孤独な人だが、Shallyは休日父親(≡舅)を連れて映画に出掛けたりもする。どこへ行っても舅は細かいことをグチグチ言うのだが、彼女は「あーもう、うるさいわ

ねー」と軽くあしらいつつ付き合っている。実に親孝行だ。

Shallyの性格は姑ほどではないが、やはり明るく柔軟性に富んでいる。仕事は花形の電子産業で、会議の為にニューヨークや東京にも出張するし、部下も一人いる。絵に描いたようなキャリアウーマンだが趣味はMRT（新交通システム）の乗車券集めとお茶目だ（この乗車券は日本のテレカとそっくりで、いろいろな図柄がある）。オフタイムは友人との食事やエアロビクスで過ごし、お肌のお手入れにフェイスシャルエステにも行っている。

彼女は自分の母親（＝姑）を見て思うところがあるのか、マージャンは一切やらない。また、恋愛にも慎重なようで三十路に入った今も恋人募集中だ。だが、自分の中心がきちんと定まっている人らしく、しなやかな考えを持っている。結婚できればいいし、しなくても一人で生きて行ける。仕事を続けてもいいし、この先状況が変われば辞めてもいいといった、全方位型の姿勢でいる。

ところで、私からするとShallyは「小姑」ということになる。日本語では何だか小うるさくて底意地の悪そうなイメージがあるこの言葉だが、中国語ではそういった意味合いは全くない。単に夫の妹を指すだけの言葉だ。私にとっての小姑は、家族の中で「自分と同年代の女性」として話しが出来る貴重な存在だ。

彼女は「肉じゃが」が好きで、私を作るたくさん食べてくれるのだが、願わくば将来は素敵なパートナーを連れて「肉じゃが」を食べに来て欲しいと思っている。きつと、

もつと共通の話題が広がるだろうから。

（補足）本章では特に姑がものすごく破天荒な人であるような印象を与えてしまったのではないかと危惧している。文中の記述はすべて事実だが、姑も現在はマージャンも週一回程度で、異性の交際相手も固定している。生活時間こそ一般人とズレているが、決して荒れた生活を送っているのではないことをここに書き添えておく。

「言語四チャンネル」

台湾人はバイリンガル、トリリンガルも普通である

普段台北市内で暮らしているぶんにはあまり感じない緊張を、ちょっと地方に足を伸ばすと感じることもある。

例えば旅先の店に入って買い物をする。「この茶葉はどんな品物で、いくらか」を北京語で尋ねるのだが、その時台湾語や客家語で返されるともう私はその場で固まってしまう。何しろ私の言語チャンネルは日本語と北京語の二チャンネルしかないのだ。方言で話されるとお手上げである。

だから台湾国内旅行で通行人に道を聞いたり、簡単な会話をする時は出来るだけ若い人を選んで話しかけるようにしている。ただどこへ行っても北京語で話しかけて通じないということはまずない。問題は相手が普段北京語を話す習慣のない場合だ。私が北京語しかわからないのを知っていても口から出るのがどうしても方言になってしまうとい

う人がいる。そしてそういう人は年齢が高く、かつ地方に行くほど出現頻度が高くなるのだ。

因みに台湾語というのは閩南語ビナンという中国福建省あたりの方言をベースに日本統治時代の日本語が若干加わった言語で、台湾全土で本省人を中心に話されているメジャーな方言である。また、客家語とは客家人が母語としている台湾で二番目にメジャーな方言だ。台湾のテレビ局では北京語番組の他に、台湾語ニュース、台湾語ドラマ、客家語ニュースの番組がそれぞれ放送されている。

読者の中には「方言ぐらいわからないのか」と思う人もいるかも知れないが、本当にわからないのである。

例えば日本人が、韓国語で話しかけられてどのくらい理解できるだろうか？ たとえ日本語と韓国語の語順や文法が似ていても、発音がまったく違うのだから通じるわけがない。私が北京語が出来ても台湾語や客家語（ましてや原住民語）がわからないのもそれと同じである。

そもそも北京語は北京周辺の言葉であり、北京から福建省までの距離は、日本と韓国の比ではない。当然言葉の違いは非常に大きくなる（なお、台湾語と客家語もまた全く違うものらしい）。

ところで、私の夫の家族は中国広東の血筋である。舅と夫の祖母は広東育ちで広東語

が話せるが、その広東語自体は台湾ではほとんど話されない言葉だ。そこで、家庭内は台湾語が中心になった。だが、ここに台湾語の出来ない嫁（＝私）が入ってきた為、現在は共通語である北京語が大量に導入されている。また、舅は英語が出来る為、彼は言語四チャンネルの人ということになる（小姑の Shelly は英語、北京語、台湾語の三チャンネル）。

さて、これとは別にここでは非紹介したい四チャンネルの人がいる。ご近所の林さんだ（後段「日本人と台湾人の会話」「我慢しない女たち」にも登場する客家人の子育てじいさんである）。

林さんは小学校に上がる以前は日本語しか話せなかったという。戦時中、林さんの父親は日本軍専属のドライバーをしていて、当時は今でいうところのパイロット並のエリートだったらしい。日本統治時代は台湾人の家庭でも日本語を話すことが奨励され、完全に日本語で話す家の門前には「国語家庭」という札が下げられた。林さんも「国語家庭」の中で一〇〇%日本語によって育てられた。

それが、林さんが小学校入学の年に終戦となり、彼はいきなり北京語だけの学校教育を受けることになった。これと同時に今まで日本語で通してきた一家も、急に近所から白い目で見られだした。しかたなく一家の言語も客家語にスイッチ。幼い林少年も下校後は無理やり不慣れた客家語を話すようになる。

しばらくは北京語と客家語の二本立てでやって来た林さんだったが、一六歳の時に高校進学の為、台北に出てきてこれまた大変。そこは台湾語の渦だったのだ。ここで必要に迫られ林さんは台湾語を習得。四チャンネル開局して今日に至る。

だが、このうち日本語だけは戦後使う機会がなかったのかかなり錆付いている。七歳までネイティブスピーカーだったにもかかわらず、現在は簡単な日常会話聞いてわかる程度。話すほうは単語しか出てこない状態になっている。

日本語の文字教育を受ける機会がなかったから風化しやすかったのだらう。一方、昔日本語教育を受けた七〇歳以上の人は今でも日本人と変わらないほど上手に日本語を話す。

ところで、読者のあなたは言語何チャンネルだろうか？ 私の日本の実家は私を除き、家族全員日本語だけの一チャンネルである（日本人でも方言と標準語が話せる人もいるが、これもテレビの発達とともに方言はかなり標準語に侵食されている。それに大阪弁ニュースなどという番組もないので、日本国内の方言はすべて日本語一チャンネルとしてカウントしたい）。

さて、何を隠そう私は英語が出来ない（過去に大学に入学できたぐらいの英語力はあったが）。私をはじめ多くの日本人が外国語、わけでも英語が話せないことを密かに恥じてきた。私が中国語を勉強しようと思いついたのもそのせいだったが、その後台湾に住

んでみてその考えは大きく変わった。

日本人で外国語が流暢に使いこなせる人は今でも少数だろう。このことを、学校教育関係者は恥じていい。

しかし、日本国民としては国民のほとんどが日本語しか話せないことを恥じる必要は全くないと思う。むしろ誇るべきだ。

それはすなわち日本では国語教育が徹底されていることの表れだ。なおかつ、政府自体がひっくり返って従来の国語が別の言語に取って代わられるような歴史がなかったということでもあり、素晴らしいことである。

台湾の人は大変だった。昔、台湾語や客家語、原住民語で話していたところに日本人がやって来た。そしてその後五〇年以上国語として学んできた日本語を、今度は大陸から来た国民党によって捨てさせられたのだ。またしても今までまったく話されていなかった言語（北京語）を学ぶように強要され、学校ではそれ以外の言葉を話すことも禁止された（現在は方言も解禁）。

台湾人が多種言語を話せるようになったのは、林さんの例に代表されるように別に自分が望んだからではない。ただ結果としてそうなっただけだ。

しかし、反対に失われたものは計り知れない。日本では、一〇〇〇年前に書かれた「源氏物語」が今も読み継がれているが、台湾ではそうはいかない。はるか昔原住民の言語、閩南語や客家語、日本語と、すべての言語は文学芸術が十分台湾で花開く前に、他言語

に侵されてきたのだ。特に方言は確立した文字表記法を持たないので、台湾のわずかな言語文化遺産は現在口伝以外は全て北京語になおして伝えるしかない。

このように、台湾の使用言語は複雑である。なのに、その上若い人は英語が上手な人も多い。今、手元にTOEFLスコアアジア国別ランキングの資料があるが、台湾は五一〇ポイントで一六位、日本は五〇一ポイントで一八位となっている。順位は今のところそんなに高くないが、私の実感から言うと台湾人の英語への取り組みは非常に真剣だ。

台湾は国連にも加盟できず、国際的に不安定な位置付けしか得られていないし、いつ中国が攻めてくるか油断できない。経済的にも充分成熟していないから、労働条件のよい会社は外資系の会社が多い。そんな中で、人々は少しでもよい職につくために、あるいは海外へ移民する為に英語（時に日本語も）を習う。現在は小学三年生から英語教育が為されているし、街の英語学校は大繁盛。この頃は幼稚園も「双語教育」（バイリンガル教育）の看板がないと、入園希望者が集まらないくらいだ。

それにひきかえ日本は平和である。なぜ日本人は外国語ができないのかと言えば答えは簡単。外国語が出来なくても生活に困らないからだ。

日本語だけ話せばまともに就職できるし、その給料で一家を養える。海外へ移民しなくても身は安全。

最近では日本企業の海外進出が相次いでいるが、欧米を除いてほとんどの国では現地の人の方が日本語を勉強して対応してくれる。

ここで先ほどのTOEFL資料で、ランキングのもっと上を見てみよう。一位フィリピン、二位インド、三位スリランカ、四位中国、五位ネパール、六位インドネシアと続く。旧宗主国が英語圏である場合を考え合わせても、やはり経済発展に必死に取り組んでいる人達の姿が見えてくる。

つまり日本人が外国語が出来ないのは、日本に国力があるからなのだ。その証拠に例えばアメリカ人など、そのほとんどは英語以外の言語を懸命に学んだりしないし、それを何とも思っていないだろう。言葉、そして国語は、その国の歴史と文化と経済力を反映したものである。

だから、日本人には誇りを失くさないで欲しい。もちろん外国語を勉強したい人はすればいい。しかし、誇りをなくしたまま「日本で英語を公用語に」などと安易に言われると背筋が寒くなる私である。

「二一人家族長男の嫁」

台湾人の家族親戚関係はかなり密着している

仮にあなたが独身の女性だとする。

ある日彼からプロポーズされた。さあ、あなたならどうする？

彼が外国人（台湾人）でも結婚するという方は左へススム。

↓その上長男でもOKという方は更に左へススム

↓その上、結婚後は台北市内ではなく、付近に店屋の一軒もない山の中に住まなければならなくてもOKという方のみ

↓さらに、彼の家業が農水産業であつてもOKという方（一応、家業は手伝わなくてもいいという条件）。

↓ここまで全部OKで来た方は、素晴らしい心意気！

では、では。その上結婚後は彼の家族と同居しなければならないとしたら？ それで

もOKの方は左へどうぞ。

↓いよいよ最後の質問。これらの条件の上に、同居する家族が姑以下二人いても、あなたは彼と結婚する？

はつきり言つてこれほどの条件だと、結婚相手としては台湾女性からも敬遠される。だがこれらの問いに全部YES！と答えて花嫁になった大和撫子を私は知っている。名前をE子といい、現在は、桃園縣の山奥に住んでいる。

彼女の家の前には小川があつて小さな橋がかかっているが、ある年の台風時には土石流で流され、自宅はしばらく陸の孤島になった。そんな所である。

ある日、はるばる車を飛ばして彼女の家に遊びに行つた私は見た！

山の中に建つ、お城かと思ふごうばかりに大きな建物。それがE子の嫁いだ黄一族の館である。なにせ、ひとつ屋根の下におばあちゃんから従兄弟まで一族郎党が住んでいるのだから、とにかく杜宅かと勘違いするほど巨大だ。

ここまで読んだ人の中には、「何も無理に同居しなくても……」と思う人もいるかも知れないが、台湾の田舎で一族同居はザラなのだ。ましてや地主の長男ともなれば、親と別居するなど考えられない。

なお、こういった農村的家族観は台湾の場合、都市部であってもそう変わらない。台湾人で就職、就学、結婚以外の理由（例えば単なる独立）で、親と別居する人はまずい

ない。「なんで実家に住めるのに無駄金使つて独立するの？」という感じだ（但し、この国でも新妻は夫の家族との同居を嫌がる。よつて、結婚独立別居のケースがあるとすれば大抵は新妻の意思による）。

従つて都市部でも、家族親戚の密着度は日本の田舎並に高い。夫婦で毎週どちらかの実家に帰っている例は珍しくない。やれ子供が大学を受験すると言へば、親は当日試験会場までついてくる。

とにかく、日本人からすると親子親戚の関係がベタベタなのだ。つい先日、ニュースで八〇歳を越す老婆がホームレスになつて地下道で寝起きしている様子を報道していたが、テロップには「子供の親不孝」と出ていた。生活保護や年金制度の不整備よりも、「親不孝」の方が責められる！

さて話を黄さん一家に戻す。この家の中にいったいくつユニットバスがあるのか、よくわからない。おじさん一家とか、E子夫婦とかいくつかのグループに別れて、それぞれ専用ユニットバスを使用しているようだ。

だが、台所はひとつである。二〇畳ほどもあるそれは、もはや厨房と呼ぶ方がふさわしい。冷蔵庫はもちろん銀色に光る業務用だ。自宅付近には歩いて行ける食堂などないので、当然三食自炊である。二〇人前の食事を作るとなると、いったい何合の米を炊くのか、私などには見当もつかない。

やがて陽も傾き、私たちは一階にある食堂に案内された。

お客ということで真つ先に食堂に通されたが、他にはまだ誰も来ていなかった。どうするのかと見ていると、E子のお姑さんがやおら電話機に駆け寄り館内放送。内線を通じて全館に「ご飯できたよー」の声が響いた。

すると、おじさんとE子のご主人ら男衆がワラワラ現れて、一〇人掛けの食卓はあつという間に満員御礼。他の人はどうするのかと尋ねると、「あとで」と言う。黄家の食事は二部構成、客総入れ替え制。さながら新宿コマ劇場だ。

ところで、タイトルに二一人家族と書いたが、この数字の前には「約」をつけたほうが実情に合う。家族の中でも若いイトコなどは、海外留学に行っていたり、恋人の所に入り浸って帰って来なかったりと、人数は流動的である。

そうそう流動人数と言えば、このところE子の義弟の部屋に上がり込んで同棲状態になっている彼女はこの人数に入っているのか不明である。何しろ、家も大きく人数も多いので、誰がいつ出ていつ帰ってきたのかよくわからない。

ご飯だって、ある時に食べなければありつけないし、お菓子も見かけたらその場でポケットにネジ込むのが原則だ。

この黄さん一家は客家^{ハッカ}だ。客家^{ハッカ}とは中国のユダヤ人とも言うべき流浪の民。もとは大陸の湖南省あたりにいたらしいが、水害に追われたりして民族散り散りになり、どこ

へ言つても「よそ者のお客人」として扱われたのが客家の呼び名の由来という。ユダヤ人のような民族独自の信仰はないが、流転しつつも客家語という母語は大切に今日まで伝えて来た。

だから、家の中は客家語が充満。北京語と日本語しか出来ないE子の頭上をノイズとして流れてゆく。E子には三歳になる息子がいるが、八七歳の（息子からすると）ひいおばあちゃんは客家語しか出来ないで、この頃は息子が通訳をしてくれる。

また、客家人は質素な生活振りで知られている。黄家は地主なので野菜はほとんど、おばあちゃんとお姑さんが自前の畑でつくる。鶏も飼っているの、採って来た卵は割ると黄身がモリモリしている。

この家では、鶏肉は買うものではなくシメるものである。さすがに都会育ちのE子に「シメろ」とは誰も言わないが、彼女も嫁いで五年。羽をむしるぐらいは出来るようになったのだからエライものだ。

さように黄家の家風は質素だが、実はこのウチは蘭の栽培と錦鯉の養殖をしていて、とても裕福である。特に本業である錦鯉の商いは、海外の客も多く順調だ。

「質素」と「裕福」が融合すると、実に微妙なセンスが生まれる。

あれはE子がまだ新婚の頃だった。「ちよつと見てー！」と姑がプレゼントしてくれたというブラウスを見せてくれたことがあった。

ペンキをぶちまけたような目の覚めるオレンジ色で、合成繊維のテロテロで、オレンジのフリルがついていて、ボタンがピカピカ光っていて、体にフィットしない寸胴シルエツト……。新手の嫌がらせとか？……ではない。

姑の質素な感性により、そのブラウスはデパートではなく市場で購入したモノだ。但し、お金はあるからヒドイ安物などは買わない。そこで、市場で売っている中では上等なモノ（一着一〇〇〇元くらい）を選ぶ。これが、黄家の絶妙なチョイスである。

E子のご主人の普段着は仕事から短パンにTシャツだが、運転する車はベンツ。それから、ご主人が新居用に買ってきたダイニングテーブルも逸品（E子夫婦は敷地内に別棟を建てて独立する計画）。大木をスパツと輪切りにしてその年輪面をテーブルに仕立てたヘヴィ級。クレーンで搬入した。日本では信州の蕎麦屋にでもありそうな民芸調で、とても素朴なテイストなのにもすごく高価なシロモノ。

もちろん、現代的日本人である彼女の趣味ではない。新居の為に、日本のインテリア雑誌を眺めていた彼女の眉間に皺が刻まれたのは、こういう事情による。

ところで世の中には「今晚のおかず何にしよう？ 面倒くさいわね」という奥さんが沢山いるが（私のこと）、そんなことを言っているようでは甘い。E子には、晩ごはんどころか一日三食何を食べるか選択の余地さえない。お姑さん達が台湾料理＋客室料理を作るのを手伝って、食べるだけだ。

そんな嫁の鏡E子でも、最近ちよつと耐え難いことがある。それは、自分もただでさ

え幼子が二人いて忙しいのに、甥（小姑の息子）の世話まで押し付けられることだ。甥は本来お姑さんのところに預けられているのだが、お姑さんも手が掛かって面倒らしくてすぐE子に押し付けて自分は畑に逃げてしまうのだそうだ。

嫁も実の娘のように接してくれるのは有難いが、嫁いで五年ともなるとお姑さんの口調が遠慮会釈ない命令形になって来て、E子はそれが不満だという。

「なんで私が甥っ子のお尻まで拭かなきゃなんないの？ 疲れるうー！」E子の眉間の皺は最近三本に増え、もはやSK・IIローションを叩き込んで消えないほどになった。

「結婚生活は格闘技である」

個性と個性のぶつかり合い。強者が弱者を凌駕する。E子の毎日は私達に結婚の本質を教えてくれる。

私だって、「格闘技は嫌だから、腕相撲程度にしておきたい」と思う。だが、結婚した時点で、相手の家族も自分の家族とした以上、いつなん時全面格闘に突入しないとも限らない。事態は自分ひとりではコントロール出来ないのだ。

「お金のゆくえ」

台湾人にとって投資は国民的レクリエーションである

ある日、育児友達の陳さんが小さなため息をついた。聞けばご主人の実家が株で大穴を開けたと言う。そこで私は彼女を励まそうと、我が家の事情を語った。

私「よくあることよねー。ウチの舅なんて、株と変な投資でマンションふたつ、スッチャったわよ」

いったいウチの舅（台湾人）はいつどうやってそんな大損したのか？ ちよつとここで、過去の台湾上場株式市場概況を紹介しよう。ネットで株関係の資料を探すと、いやもう出てくる出てくる、洪水のようだ。その資料の洪水を掻き分けてやつと見つけた統計によると……。

（台湾株価の推移は通常、加権指数という数字で表される。以下の数字は加権指数）

一九八六年〇一月	八三九・七三
一九九〇年〇二月	一二四九五・三四（過去最高）
一九九〇年一〇月	二五六〇・四七

おわかりだろうか？ この数字は嘘ではない。一九八六年にたったの八三九・七三ポイントだった株価指数は、なんとわずか四年後の一九九〇年二月に一二四九五・三四ポイントにまで膨れ上がったのだ。そして、同年一月には二五六〇・四七にまで急降下。一九九〇年といえはたしか日本もバブルで大年である。台湾もつきあいよく日本の後を追った。夫の回想によると、舅は以前台湾式フライド三室を所有していたそうだ。往時、株価指数が夫は舅に株を買うことを勧めたが、舅は聞き入超えた時も、舅に「まだ株は買い時だ」と助言舅はとりあわなかった。だがしばらくして今度は舅から「株を買い時だ」と言い出した。何しろ、株を買うとあつという間に何倍にも値上がるのだ。周りには株成金が急増し、マンションをバンバン買っている。舅は地道な商売がつまらなくなり、投資による倍速成長を夢見るようになったらしい。

サンプルはここまで

しかし、この時点で株価指数は一〇〇〇ポイントを突破していた。夫はもう株価の